

1. 身の程をわきまえる

「事業を拡大し過ぎない、自事業と関係ない分野に手を出さない」といった“老舗の家訓に残る戒め的な”意味合いだけではなく、「身の程＝自社の強み・弱み」をよく理解し、自社の特徴を生かせる分野を発掘し、「ニッチ＝”生態的に”適切な」地位を見つけ出すことを常に考えている。

- ・新成長分野に対して、銅粉というコア技術をどう生かせるか先を見る姿勢(福田金属箔粉工業)。
- ・買収したフランス企業に対して、フランス文化の上を行く“日本の京都文化”の奥深さを見せつけて、参らせてしまう発想(堀場製作所)

2. 伝統の襷をつなぐ使命感

家業としての何代目といった連続性を遥かに超えて、漆塗りの場合、縄文時代まで遡る日本文化の継承に、“いま、ここ”に携わっていることに対する誇りと使命感を持って仕事をしている。

京釜も同様に、「茶の湯」という日本文化の本道に対して、特に肩に力が入っている訳ではなく、“いいもの”を追い続ける姿勢は、“伝統”という重みがなせる業とも言える。



赤色漆塗り櫛(縄文時代)
：鳥浜貝塚遺跡
(福井県若狭町)

3. 不易流行

企業で言うと“コア技術”、個人事業者で言うと“型”。

コア技術を如何に新成長分野に適用するか／型を持ちながら、その型を破るのが型破り

- ・福田金属工業の電磁波シールド塗料用金属粉＝金属粉のコア技術＋ハイテク機器
- ・近藤高広氏の芸術活動＝陶芸の型＋銀滴彩に代表される技法